府中町ふるさと歴史散歩〔第32回〕

神武天皇東征伝承と府中町①

広島駅前から府中山田行きのバスに乗り、「府中えのみや」のバス停で下車すると、左が町立歴史民俗資料館（旧府中町役場）で、右に多家神社（埃宮）がある。神社の石段を登らず左側の緩い坂道を行くと神社の裏手の長福寺山にでる。そこに「神武天皇聖蹟埃宮多祁理宮顕彰碑」と刻まれた高さ３ｍの大きな石碑が石柵をめぐらせて建っている。今回は、府中町の今昔を知るうえでこの顕彰碑が、どうしてこの地にあるかについて触れておきたい。

古代の歴史の最初に、神話・伝説の世界から始まる記述が多いのは、何も日本の『古事記』や『日本書紀』だけでなく、司馬遷の『史記』にもあって珍しくはない。世界最古の文明を築いたメソポタミアのシュメール人の王様の名前を刻んだ王名表も神話の中に始まっている。古代人の歴史認識が、これを歴史の始まりと考えていたに過ぎず、神話と史実との区別がつかなかったからである。神話はあくまでも神話であって史実ではないことを銘記しなければならない。

初代天皇の神武天皇が、神話上の人物であって実在の人でなく、史実性が全く認められないことは、戦後の歴史研究で明らかになっている。もっとも戦前の大正時代に、この神武伝承を批判し、その実在性を否定した学者に早稲田大学の津田左右吉教授がいたが、その著作が学者を相手とした純粋に学問的なものであったため、世間の注目を受けず、また皇国史観の圧力の前に屈しざるを得なかった。戦後、津田先生は、日本及び東洋の思想史研究に多大なる業績が評価されて文化勲章を受章するに至った。

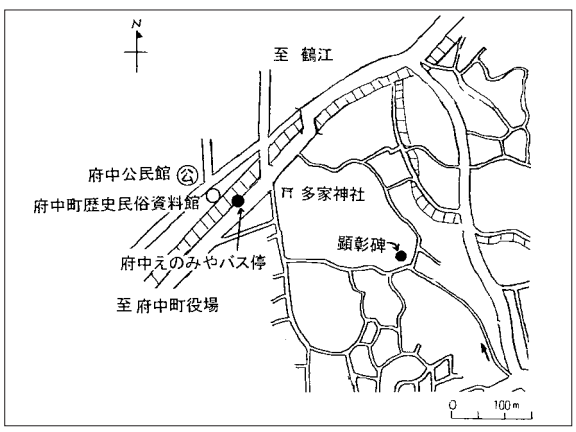
神武東征神話と府中町との関係について、大変分かりやすい論文がある。広島大学の日本史の教授であった小倉豊文先生の「安芸府中と多家神社（埃宮）」と題する小論である。少し長いけれども引用する。昭和46年発表の文章であることに留意してほしい。誤字等は訂正した。

〝現在でも中年以上の町民の中には、安芸府中は西暦紀元前660余年前、日本国第１代の王者、神武天皇が九州から大和への「御東征」の途中、行宮を造営して軍を駐留せしめた、阿岐国埃宮（また多祁理宮とも伝える）の所在地であり、現在の多家神社が其の遺跡であると信じている者がある。府中小学校の太平洋戦争敗戦前の校歌にもうたわれていたのであるから無理もないとは思うが、「神武天皇」が８世紀に出来た日本最古の歴史書の編者らのでっち上げた仮空の人物であることが、すでに常識的にすらなっており、紀元前600年頃の日本列島は考古学上、縄文時代で、金属器もなく米作りも行われず、原始的な部落国家もなかったことは、小学校の生徒も知っている筈だから、こんな「お国自慢」はサラリとすてて、むしろ現在は広島市が広島県の政治の中心だが、1000年の昔は府中が安芸国の政治の中心だったということを「お国自慢」とした方が、気が利いていると思う。〟（『安芸府中の歴史と文化財』昭和46年刊より）

〈広報ふちゅう８月１日号へつづく〉

府中町文化財保護審議会会長
横田禎昭

問い合わせ
教育委員会生涯学習課
☎２８６―３２７２



地図　神武天皇聖蹟埃宮多祁理宮顕彰碑の所在地

写真　神武天皇聖蹟埃宮多祁理宮顕彰碑
（高さ３ｍ、幅96cm、厚さ53.3cm）